

がん免疫療法における末梢血がん反応性 T 細胞の意義

谷口智恵^{1),2),3)}

- 1) 京都大学大学院医学研究科 がん免疫総合研究センター 免疫代謝研究講座
- 2) 京都大学大学院医学研究科 がん免疫総合研究センター 免疫ゲノム医学講座
- 3) 京都大学大学院医学研究科 がん免疫 PDT 研究講座

抄録：

抗 PD-1 抗体などの免疫チェックポイント阻害薬 (ICI) は、様々ながん種で標準治療となった。一方で、治療効果を規定する抗腫瘍 T 細胞応答の実態、特に末梢血中に存在するがん反応性 T 細胞 (tumor-reactive T cells: TR-T) の特徴や役割については、解明されていない。我々は、非小細胞肺癌 (NSCLC) 患者の腫瘍組織および末梢血由来 CD8 陽性 T 細胞に対して単一細胞 RNA/TCR 解析を行い、CD49a/b および HLA-DR を用いることで、末梢血中 TR-T を濃縮可能であることを見出した。さらに、ICI 奏効例では、治療後に TR-T が TCF7 陽性の幹細胞様状態へ移行することを見いだした。これらの結果は、末梢 TR-T の分化状態や動態が、ICI 治療効果に関連する可能性を示唆する。本講演では、がん免疫療法の基本概念を概説し、末梢血中 TR-T の同定法、その分化動態と ICI 治療効果との関連、さらに低侵襲バイオマーカーや次世代がん免疫療法への応用可能性について紹介する。